

## おしやべり

楠本 奇蹄

- 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1  
 あたたかや疎林のやうにまた眠る  
 雛の眼に良き音の雨やどりけり  
 菜の花の靡いてあどけない白紙  
 おしやべりの底の海市にさはりたい  
 妹に亜種のごがほ花の夜  
 春の水コップをあふれずに痛い  
 残像をまるごと啜る蜆汁  
 沈丁花ひだまりを半分ください  
 耕してゆくたび白い主語になる  
 共感にすこし汚れて葱畑  
 栈橋に乾く鎖骨や春惜しむ  
 ゆく春は畳に肘の痕を残し  
 初夏の海へと机まつすぐに  
 聖五月ひつじにひかりひとつずつ  
 夏蜜柑切つて夜空はうまれたて  
 六月のリュートをあをい火とおもふ  
 カンヴァスに背中が群れる桜桃忌  
 雨粒を背に天牛のゆがみかな  
 夏風呂や笑ひ終はつて木の時間  
 骨盤の奥まで港あをしぐれ  
 メランコリ採血に西日が混じる  
 釣堀に雨のあかるく沈みけり  
 ゆふやけや老画家の半身は湖  
 脱いだ服ほどのはつねつ夏座敷  
 虹がはじまる家々をぬけがらにして
- 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26  
 哺乳瓶に誰が早を入れたのか  
 アパシーの縁より崩れかき氷  
 夕立が来る前髪を寄せておく  
 闇色のグミ噛みきれず夢二の忌  
 消印の昏さ剥かれた桃を喰ふ  
 いととんぼ耳鳴りが繋がつて雨  
 振り向くとき小鳥は僕の死ねない眼  
 葡萄吸ふ口して秘密わかちあふ  
 椿の実かはたれの兄眠らせよ  
 鶺鴒の別れが白く残る河  
 銀木犀ちひさく夜空そらんじる  
 名月よ肉筆の川濡らせ濡らせ  
 小春日は梯子の翳の逃げたい日  
 蛇笏忌のせせらぎと云ふ背骨かな  
 白鳥は来ぬ虹彩の草臥れに  
 公魚を並べて爪のやはらかさ  
 鉄塔や胸深くまで冬夜空  
 寒卵海のちかくに膚がある  
 口描きて焦点あはぬ雪だるま  
 くちびるをむさぼる冬の木になつて  
 竹馬やちひさき陸を捨てられず  
 鮫鱈を吊るして星の生まれけり  
 フアスナーをさぐる枯野が濡れてゐる  
 讚美歌のやうに焚火のけむりかな  
 雪ふるや火種をつつむ手のかたち